

行ってきました！「京^{みやこ}まなびミーティング」 その模様をマナビィが御報告します！①



京都市社会教育委員が学校や地域に出張し、各専門分野に関する特別授業や公開討議を行う「京^{みやこ}まなびミーティング」が、今年度から始まりました。まずは、通崎睦美委員の「京まなびミーティング」をわたくしマナビィが取材してまいりましたので御報告します！会場は熱気に包まれ、生のマリimba演奏もステキ♡だったなあ〜

日時：平成23年10月31日（月）午前10時～12時
場所：京都市東部文化会館（山科区）
講師：通崎 睦美委員（マリimba奏者、京都市社会教育委員）
テーマ：アートをまとう ～銘仙着物と音楽～

○ 木琴とマリimba



マリimbaは全長 2.7m あります。

マリimba「marimba」のルーツはアフリカで、奴隷貿易船で、まず南米に伝わり、100年ほど前

にアメリカ合衆国で現在のようになりしました。

木琴「xylophone」はザイロフォン、ヨーロッパ読みをするとシロフォンです。「xylo」は「木」という意味です。木琴はヨーロッパで生まれ、最初は鍵盤が縦に並んでいて、演奏が難しいわりに良い音がしない楽器でした。木琴もアメリカに伝わり、マリimbaと兄弟のように似た楽器となりましたが、生まれは全く違います。

鍵盤も、マリimbaは鍵盤の裏が薄く削られ、よく震えて響き、大変余韻が長いのですが、木琴は削り方が少なく厚いままなので、震えずに“カン”と通る音がします。

日本には戦前まで木琴しかありませんでした。

平岡養一さんという1907年生まれの木琴の演奏家がありました。小学生のとき、銀座の映画館の楽土の木琴に憧れて独学で演奏技術を身につけました。

平岡さんの初のレコード「金婚式」が大ヒットし、その資金で木琴の先進国アメリカへ渡られます。そこで11年半、毎朝NBCのラジオ番組で木琴演奏を担当され、全米の少年少女は平岡さんの木琴で目を覚ますと言われたくらい大人気になったのです。

戦争が始まり、日本に戻ると、当時、日本音楽界の大御所だった山田耕筰氏らと共に演奏活動を始めます。敵国民が彼の木琴の音色にひれ伏したという宣伝文句で有名になり、オーケストラとの共演などで、

日本各地で演奏会が開かれました。

マリimbaが日本に入ってきたのは1950年頃。ラクア音楽伝道団のラクア夫妻というアメリカの代表的なマリimba奏者が広めました。

当時のアメリカの文化や豊かさへの憧れがマリimbaの豊かな響きと結びつき、「これからはマリimbaの時代だ！」と和やかな木琴の音を捨て、マリimbaばかりが作られるようになっていきました。

その結果、平岡さんが日本で最初で最後のプロ木琴奏者となってしまいました。

御縁があり、平岡養一さんが使われた楽器を私が譲り受けて演奏しています。



○ アンティーク着物あれこれ

同じ時代に日本人が捨てたものに着物があります。「捨てた」と言うと語弊がありますが、高度成長期になると着物を着る人が減ります。

私にはいつの間にか「アンティーク着物コレクター」という肩書きがついて、たんすには着物と帯が600点ありますが、最初に出会って衝撃を受けたのがこの綾子（りんず）の京友禅の着物。大正生まれの叔母が十代の頃に着て、たんすに眠っていたもので、「これはいいな」と思い、これを着るために着付けを習って、今では簡単に着られるようになりました。藤の模様で色合いが斬新。いつも同じ帯では退屈なので、合う帯を天神さん



や弘法さんで買い始め、たんすがいっぱいになっていきました。この着物の糸は手撚りなので、細くデリケートで、ものすごく軽やか。自転車に乗っても平気です。戦後は機械撚りになり、重くて着るのがおっくうになっていきます。

もう1つ出会いがあった着物がこちら。斬新な柄の1920年代の一重の「銘仙（めいせん）」。蚕のくず繭で作ったのが銘仙のはじまりで普段着の代表です。北関東の絹の産地で多く作られていました。

目千・太織とも呼ばれ、人によってはおでかけ着にもなりました。

例えば、現代のTシャツを考えると、390円のものもあれば、数万円するブランドものもある。銘仙はそういうイメージです。



銘仙がおもしろいのは、柄に斬新なものが多いこと。着物の文様には意味があります。例えば赤ちゃんには麻の葉の模様。麻のように丈夫にまっすぐ育つよんという意味があります。他にも、矢は行って戻ってこないの「矢がすり」は嫁入りに持たせると良いとか、「蝶々」は脱皮して舞い上がるので武家では発展する良い柄ですが、蝶は浮気者なので婚礼の場にはふさわしくないとか。

その意味合いが薄れてくるのが1900年頃。パリ万博でアールヌーヴォー（植物柄を幾何学的・曲線的にしたデザイン）が出始めます。今のようにインターネットで情報交換ができない時代、いろいろなものが集まる万博は大変な情報交換の場でした。そこで、ヨーロッパのものが京都にも伝わり、フランスのジャガード織を西陣織に利用したり、アールデコの大衆化した柄が着物にも採り入れられるようになりました。

お嬢さん学校であった学習院の院長に質実剛健の乃木将軍がなり、学校には絹の友禅でなく「銘仙程度の着物を着ること」という校則を作りました。しかし、お嬢さんたちはかわいい着物を着たいので、伊勢崎などの産地の業者が京友禅のような柄や凝った模様を考え、だんだんと銘仙が派手になり、「学習院好み」「お茶の水好み」といった流行ができて、巷に銘仙が広がっていきます。

記念にお揃いのTシャツやボールペンなどのグッズを配るように、当時は帯留や着物をお揃いで作っていたようです。

データを見ると、銘仙は大正時代に出てきて、昭和の初めに流行したようです。

昭和30年代前後には、面白い柄のものが多く作ら

れて普段着として着なくなり、その役目がウールやポリエステルに代わり、やがて作られなくなりました。

一柄何反織られたかはデータがなく、サンプルで織られて生産されなかったものもあれば、ヒットして大量に作ったものもあります。一柄を400反作っただとして計算すると4億反。世の中に柄違いが数百万あると思うと面白いですね。

○ 木琴奏者、平岡養一氏

木琴奏者の平岡養一さんは子どもの頃から言葉がうまく言えずいじめられ、泣いて帰ってくると、お母様が「神様は1つ才能を与えているはずだから、何か1つ見つけて一生がんばりなさい。」と言ったそうです。そんなとき映画館で木琴と出会い、木琴に魅せられて一生の楽器として取り組みますが、アメリカでの苦勞は並大抵のものではなく、東洋人で身体的ハンデがあり、非常に大変なところからアメリカでの地位を築かれアメリカ人に愛されました。

戦後の第1回紅白歌合戦に出演した国民的音楽家だったのに、今はマリンバ専門の学生さえも、彼の名前も知らない状態です。

御縁があって彼が使った楽器を触らせていただいているので、演奏の場で平岡養一というすごい日本人がいたことを伝えたいと思っています。



マリンバと木琴、着物と突拍子もなく違う話のように思えるかもしれませんが、1950年代に木琴もマリンバに取ってかわられ、着物も洋服に取ってかわられました。いとも簡単に忘れてしまったことがたくさんありますが、それを見直すことで、生活の仕方が見えてくるのではないかと思います。古いものを伝えていくことは難しいですが、昔の人が大事にしていたことを次の世代にも伝えられたらいいなと思っています。

○ 「ならでは」の生活を楽しむ

家の向かいに小さな長屋を買い、600点の着物の入ったたんす12棹の倉庫にしています。近所の立派な大正時代の家が壊されたので、古材バンクに登録された今では手に入らない古い建具や木材、ガラス等の具材をリノベーション（再生）に流用しました。タダでいいなと言われるかもしれませんが、立派な家の建具は寸法に合わず、建具に合うよう家を直しました。できるだけ天然の素材を使おうと、壁は和紙を貼り、のりにも漆を混ぜて、和紙をまた漆できれいに色を整えました。

天然・自然のものを使う、古いものを流用する、着物を着て、木琴を弾く。どれも素晴らしいことのように思えますが、苦勞と不便を伴います。

長屋は隙間風がすごいし、夏は屋根から焼けて1階でしか過ごせないし、冬は1階は底冷えて2階しか過ごせません。自然を大事にした昔の生活に戻ろうとすると大変な困難を伴いますが、「ならでは」のこともあるので体験するのも悪くありませんよ。

これがいいと言うとそればかりの「至上主義」ではなく、それぞれのいいところをうまく採り入れながら生活したり、ものを考えることができればいいですね。



★質問コーナー★

たくさんの質問を頂戴し、盛り上がりました！

Q. 後ろにかけてあるマリンバ模様の着物は？

A. 江戸時代、自分の気に入った絵師（尾形光琳など）に図柄を描いてもらう「描繪小袖」をまねて気に入った画家に描いてもらいました。マリンバとマレット（ばち）の柄でインクジェットで印刷されています。画像をコンピュータから出力し、生地がプリンタから出てくるのですが、途中で印刷ミスがあると一反丸ごとパアになってしまいます。手軽そうに見えて難しい技法で、難が出たところは地直し屋さんで調整しました。



Q. 手に入れた着物は必ず着られますか？

A. 男性コレクターは柄に飛びついて買うので難のあるものも買われますが、女性コレクターのコレクションにはバラつきがなく統一されていると言われます。サイズや状態、自分の好み、着られるかどうかを基準にしていますが、全て着たわけではありません。同じもの・気に入ったものばかり着てしまいます。

Q. 年配向きの柄はお持ちではないですか？

A. 派手なものが好きなので、20代から集め始めましたが、今の自分には難しく感じるものもあります。地味な縞、男性ものの銘仙もありますが、派手なものばかり選んでしまいます。

Q. 帯はどんなものを合わせますか？

A. 柄に柄を合わせて、無地は合わせません。いつも攻めの姿勢ですね。

Q. マリンバの製造メーカーは日本にありますか？

A. 今日の楽器は「こおろぎ社」という福井県鯖江市のメーカーで、日本のトップブランドです。子ども用の卓上木琴を作っていた時代にくろくろかわいい音色が鳴るようにと名付けられた社名ですが、世界に通用するコンサートマリンバを作り始めて「こおろぎ」はピンとこなくなりました。他にもヤマハがあります。

Q. 鉄琴と木琴の違いは？

A. 鍵盤の素材が、鉄琴は金属でマリンバは紫檀（ローズウッド）です。これはホンジュラス産の木を何十年も乾燥させ、人工乾燥させて削って作っています。ピブラフォンは機械がついていますが、マリンバは筒の中で空気が動いているだけです。

Q. ばちはどうなっていますか？

A. 何十種類ものばち（マレット）を持ち歩いています。持ち手はもともと木でなくラタン（籐）で、上にスーパーボールのようなゴムがついています。自分で毛糸や綿糸を巻きます。アクリルよりウールが良かったり、100回と110回巻きとでは音色が違います。

通崎委員の着物コレクション

シャープ柄 1930年代 赤・白・黒は流行った色合い。



これまで花鳥風月をデザインしてきたのがどどん派手でカラフルに…

大サービスで着ていただきました！



白地に竹の柄。竹なのに緑が入っていないのが大胆で斬新！

スタート！

大胆なかすり。いろいろなネタをまねて作っていたよう。派手で袖が長いのでおてんばなお嬢さんがおけいこに着ていったのかな？



新体操設立記念みたい？仮織して染めてほぐして織り直す変わった作り方で立体感を。

もともと地味な銘仙が派手になっていきます。



糸巻き柄？分銅柄？分銅はお金を計るものなのでお金持ちになれる。水玉のようにも見えますね。



彼岸花やらん菊を超巨大に。黒に赤だけだときつすぎるので、花のラインを出すのに白のふちどりを。ピンクと赤でぼかすデザインの工夫があるのが銘仙の特徴。

人気のペンギン柄！日本人が初めて南極に行ったというニュースを着物にした??今のTシャツと同じ感覚で、流行るとロゴTシャツが出るようにこの時代も着物が作られました。



皆さんから歓声！

新しく花柄も洋花、ブーケという発想も出てきます。万年筆・本・巻尺が描かれて、今の入学のお祝いはお金の場合が多いですが、反物で新しい着物を誂えてもらうことが多かったのです。柄に新しいものを取り入れてみただけれど、花の知識がなくて…ぼてっとしてしまいますね。

色違いに見えるが、左が一色（緑）多い。左のペンギンのほうが織りがクリアで上等に見えますね。当時は“バッタモノ”がよく発売されていたようで、流行ったので真似して作ったのかな？本物と並べて横に持つと違いがわかって面白いですね。



ゴール！



町家しかなかったところにビルができて、若い人にはかっこいい新しいもの、流行として取り入れられていたようです。図案的にはよく考えられていて着たときにきれいに見えます。



高度成長期。カラーテレビにバレリーナ、ソファ、テーブル、ワインの瓶…戦後の憧れの生活？テレビ屋のキャンペーンかもしれないと想像できます。

「何百枚見てやっと1枚良いものがあるのが現実で、しつけのついたものだけ購入しています。銘仙は面白いと言うけれど、大抵は普通の物で、こういうのを着ていた人は特別な人ですね。」と通崎委員。